

情熱×スピリット

アカペラグループ

しゃんそん,Zさん



「アカペラ」で完成するライフスタイル。
心地よく情熱を注ぎながら、
自分たちが楽しむことを大切にしたい。

アカペラを通じて集まり、今年で結成十周年を迎えるしゃんそん,Z。
歌うことを純粋に楽しむ彼らの、活動に対する独自の考えについて伺った。

アカペラから広がる世界

これまでに地域イベントのライブを中心に、プロ歌手の前座や、地元企業のCMソングを手掛けるなど、さまざまな活動を行ってきたしゃんそん,Z。「CM曲の収録では、普段のライブではできない『作品を考えて作り込む』作業を体験できて、とても新鮮でした」と、話すメンバー。長年にわたる活動で広がった人脈から誘いを受けて行うライブ活動は、イベントの種類も観客の年齢層も幅広く、特設ステージで歌うこともあれば、観客と触れ合える距離で歌うこともある。「ほかのグループと交流したり、初めての場所に小旅行気分で行ける楽しさもある」と、アカペラを通して世界が広がることにも魅せられているようだ。

「傾けすぎない」心地よさ

それぞれに家族や仕事を持ちながらも全員がそろって続けられる活動は、家

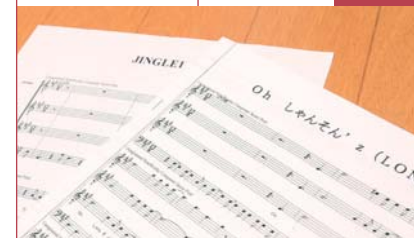
族の理解はもちろんのこと、一つの共通認識に支えられている。社会人として、家庭人として、また一人の人間として、日々の暮らしの中でどこに情熱を傾けるかは人によって違うが、この五人は、アカペラに傾けたい情熱の質と量が近いように感じているという。「決して無理はしないこと。メンバーや家族が風邪をひいたり大変なときは、迷わず練習を延期する」。五人そろっての練習が前提であるため、誰かが欠席しての練習は行わない。仕事や家庭を、アカペラよりも優先するという価値観をみんなが持っているからこそ、生活に潤いを与える要素として、絶妙なバランスで取り込むことができている。

長く、楽しく歌うために

自分の声が唯一の楽器であるアカペラという自己表現の場にながら、全員が控えめな性格のしゃんそん,Zには、「我こそは目立ちたい」という人がいない。パートへの固執もなく、曲の雰囲気

によってリードボーカルも変わる。「何かを伝えたい、感じてほしいというのは、自分たちには少しおこがましい気がする。お客さんに、ただ楽しく聴いてもらえればそれでいい。もちろんそれも、単純なようで、難しいことだけれど...」。楽しんでもらうためには質の向上も必要で、限られた時間の中での技術練習は難しい。だが、無理をせずにそこに身を置く気楽さが、ステージ上での肩の力が抜けた穏やかな空間を生んでいるのだ。「大げさですが、しゃんそん,Zは手に入れた、たどり着いた一つのライフスタイル。将来はそれぞれの子どもの結婚式で歌いたい。そんなふうに年を取りながら、おじいさんになっても今のメンバーと歌い続けられたらいいですね」。

あくまで謙虚にアカペラと向き合う五人が、ステージ上で気負うことなく、自然体で織りなすハーモニー。その優しい歌声は、日常の暮らしを大切にし、純粋に「人生を楽しむ」ことを教えてくれる。



- 1 グループのテーマ曲である「Oh しゃんそん,Z」の歌詞に合わせた「Z」のポーズ。2008年3月、倉敷音楽祭にて
- 2 「子どもがライブをまねるようになり、家では観客役」と笑う、江口真一郎さん
- 3 グループのテーマ曲の歌詞と、振り付け全般を担当する堀井剛介さん
- 4 CM曲を作曲したリーダーの藤井真吾さん。普段から曲のアレンジを担当する
- 5 「人のために歌う」という意識が芽生えてきた」と話す、舟戸千士さん
- 6 最近では自分たちよりも若い世代のグループが増え、「一緒にライブをすると刺激になる」と言う、結城正弘さん



しゃんそん・ぜっと
2000年、職場の同期である藤井、堀井、舟戸が地元のアカペラ講座を共に受講。同講座で知り合った結城を加え、4人でしゃんそん,Zを結成する。2004年に結城が転勤で岡山を離れ脱退、同時期に転勤で帰郷した江口が加入。2005年末、再び転勤で来岡した結城が再加入し、以降5人で年間10回程度のライブ活動をこなす。
<http://ww7.enjoy.ne.jp/~nabel227/>